The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	河鍋暁斎筆「地獄極楽めぐり図」と勝田家菩提寺
Author(s)	曽田, めぐみ
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 2012, 46, p. 29-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27215
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

河鍋暁斎筆「地獄極楽めぐり図」と勝田家菩提寺

曽田　めぐみ

キーワード：勝田五兵衛、河鍋暁斎、追善供養、神田山日輪寺、時宗

はじめに

明治二年（一八六九）、一人の商家の令嬢が十四歳で夭折した。名は田鶴といい、その父勝田五兵衛は東京日本橋大伝馬町で小間物問屋を営んでいた。五兵衛は本業の傍ら俳諧師としても活動し、また当世文化にも精通した人物であった。(1) 愛娘の死を悼んだ五兵衛は、日頃より贔屓にしていた絵師河鍋暁斎（一八三一～一八八九）に追善供養の作品を依頼した。(2) その作品は現在、「地獄極楽めぐり図」と題されて静嘉堂文庫美術館に所蔵されている。

画帖装の本作は全四十図からなり、各図の大きさは縦二四・八×横四〇・一cmである。その内容は田鶴が阿弥陀如来に連れられて冥界を巡るというもので、如来として往生するまでの道中が描かれている。(3) 四十図中三十四図に制作年月日が記されており、(4) 最も早い款記は第四図の「明治己巳晩春」（明治二年三月）（図1）であり、最も遅い款記は第三十二図と(5) 第三十七図の「明治壬申秋七月」（明治五年七月）である。田鶴は明治二年の三月に亡くなっており、(6) 本作の奥付としての役割を持つ第四十図に明治三年三月十日の款記があることから、田鶴の一周忌に合わせ

て勝田家に一旦納められ、後に一部増補されたことが窺える。

本作の物語は田鶴の臨終から始まる。第四図では田鶴を囲んで彼女の死を嘆き悲しむ勝田家の親族とともに、田鶴を迎えにきた阿弥陀三尊が描かれている。屏風に遮られ田鶴の体は見えないが、彼女のもとに蓮台を捧げた観音菩薩が降り立っている。その右奥では、丸に月の紋が施された羽織を身につけた男性が顔を伏せている。なお、五兵衛の俳名は「月之輪」であった。(7) 五兵衛の依頼によるものとされる暁斎の作品には多くの場合「月之輪君応需」と記されている。月之輪すなわち丸紋に月の羽織を着た男性は、五兵衛と考えて差支えないだろう。

続く第五図（図2）、六図（図3）では後光を伴う田鶴が阿弥陀如来に手を引かれて、菩提寺を後にする場面が描かれる。第五図では勝田家の墓地が詳細に描かれ、第六図では寺院が鳥瞰的に描かれている。二場面にわたって描かれるこの菩提寺は、本作品において重要な位置を占めているといえるだろう。物語の主人公である田鶴が弔われた場所という点でも重要である。しかしこれまでの作品解説や研究において、画中に描かれた菩提寺についての言及はなされてこなかった。本稿では本作に描かれた菩提寺の所在を特定し、勝田家が属していた宗派と本作との関わりについても考察してゆきたい。

一、勝田家について

まず、「地獄極楽めぐり図」の主人公である田鶴が生まれ育った勝田家について紹介したい。なお、勝田家に関する先行研究は、加美山史子氏の論文「勝田五兵衛と勝田家に関する一考察」（『暁斎』第五十八号、河鍋暁斎記念美術館、平成九年）に詳しく、本項は加美山氏の研究に依拠するところが大きい。

勝田家は勝田市兵衛を本家とする商家で、五兵衛はその分家にあたる。『日本橋区史』[8]によると、勝田家は十組問屋のひとつであったことが知られる。十組問屋とは、上方からの下り商品を扱う江戸の問屋が商品を菱垣廻船に積み合い海難事故の被害を相互に負担し合うことを目的として、元禄七年（一六九四）に結成された問屋仲間の連合体である。安政三、四年（一八五六、七）に出版されたと考えられている三井文庫所蔵「十組丸合組積合仲間」（図4）[9]には、多くの商家とともに

小間物問屋（大伝馬町二丁目勝田屋五兵衛、大伝馬町二丁目勝田屋市兵衛、室町一丁目勝田屋善蔵）、扇問屋（大伝馬町二丁目勝田屋市兵衛）、草履問屋（大伝馬町二丁目勝田屋市兵衛）、針問屋（大伝馬町二丁目勝田屋新七）、傘問屋（大伝馬町二丁目勝田屋市兵衛、室町一丁目勝田屋善蔵）、雪踏問屋（大伝馬町二丁目勝田屋市兵衛）

と、勝田家の人々の名が連ねられている。本資料からは、大伝馬町二丁目で勝田屋市兵衛、五兵衛、新七が六つの問屋を営んでいたこと、屋号を同じくする勝田屋善蔵は室町一丁目で商いをしていたことが窺える。この善蔵に関する資料としては、大正五年（一九一六）に出版された「時事新報社第三回調査全国五拾万円以上資産家」（神戸大学付属図書館、新聞記事文庫蔵）が挙げられる。ここには善蔵の長女の略歴と資産が記載されている。

七十万圓　○大鐘あくり（元傘商）室町一ノ九

▲略歴　先代善藏の長女にして明治十二年十二月を以て生る、同四十三年八月家督を相續す屋號を勝田と稱す

「元傘商」とあることから、大正五年の時点では既に店をたたんでいたこと、勝田は屋号で本姓は大鐘であるこ

とを窺い知ることができる。

加美山氏が制作された「大伝馬町勝田家関係年譜」[10]によると、本家市兵衛は文政二年（一八一九）に雪踏を、天保四年（一八三三）には扇を加え、嘉永四年（一八五一）以降からは小間物を取り扱い始めた。また関東大震災が起こった大正十二年（一九二三）まで、小伝馬町で鼻緒商を営んでいた記録が残っている。分家五兵衛は明治十八年（一八八五）まで大伝馬町で小間物問屋を営んだが、明治十九年（一八八六）には勝田屋善蔵と同じ室町で商いを始めた事がわかっている。

新聞記者であり風俗研究家でもあった篠田鑛造（一八七二～一九六五）は、勝田家について以下のように記している。

本家市兵衛方は日本橋大伝馬町の、現在打刃物砥石問屋〈二商店のところに住まい、分家勝五方は同所服部酒店のところに所在した。勝田一家が檐を並べて、明治二十年（五十二年前）まで開店。主人市兵衛は同十五年区会議員を勤むといえば、まだまだ同家の事は、もっと詳しく知られる。[11]

この記述から知り得ることは、篠田が本稿を執筆した昭和十四年（一九三九）頃には既に、勝田家が商いをしていた地は砥石問屋と酒店に入れ替わっていたことである。また明治二十年（一八八七）まで開店とあるが、これはその年に店をたたんだというよりも、商いの拠点を大伝馬町から小伝馬町や室町に移した、と解釈すべきであろう。

明治四十三年（一九一〇）発行の『中央公論』に島崎藤村（一八七二～一九四三）が発表したエッセイ「スケッチ」[12]には、勝田家の繁栄とその後が詳細に記されている。

私は勝田の一門の繁栄を追想せずに居られない。それを考へると、確かに商家といふものの歴史が時代と共に一回転したことを感ずる。唐物店、荒物店、下駄店、其他勝田の暖簾を掛けた大きな問屋が、石町の通に軒を並べた頃は、実に全盛を極めたものであった。（中略）私は吉村のおばあさんから、よくあの御隠居の話を聞くが、先代の菊五郎を贔屓にして、舞台の上から御辞儀をさせた程の豪奢を尽したものであるといふ。（中略）この勝田の分家にあたる勝新の娘の法事が浅草の寺であった時、私は一度御隠居といふ人を見たが、その頃は勝新の方が栄えて、本店は最早余程衰微して居た。勝田の一門は今は多く跡方も無い。御隠居も亡くなった。鼻緒店、針店、この二軒が継続して商業を営んで居るばかりである。

本文中に登場する「吉村のおばあさん」とは藤村が上京中に寄宿していた吉村忠道家の嫗だと考えられる。御隠居よりも栄えていたという「勝新」とは、針問屋を営んでいた勝田屋新七のこと。また、藤村が本エッセイを執筆した当時、新七営む針店と本家市兵衛が営む鼻緒店のみが継続していたことが窺える。

なお、「先代の菊五郎」とは五代目尾上菊五郎（一八四四～一九〇三）のことで、勝田家はその贔屓筋であった。(13) 五代目菊五郎は「地獄極楽めぐり図」第二十三図にも登場しており、田鶴の追善と深く関わる歌舞伎役者であるが、このことについては別稿を設けたい。(14)

以上のことを総括すると、勝田家は雪踏問屋から始めた本家市兵衛を母体とし、安政の頃には小間物、扇、草履、針、傘問屋にも手を広げるが、明治二十年頃を境に商いの規模を縮小し大正時代まで商家を続けた。市兵衛と同じく小間物問屋を営んだ分家五兵衛は本家とも肩を並べる長者にまで繁栄を遂げ、一時代を築いた勝田家は文化

の庇護者となるほどの財を誇った一族であったことが窺える。

二、勝田家の菩提寺

「地獄極楽めぐり図」第五図（図2）、六図（図3）に描かれた勝田家菩提寺を特定するにあたり最も重要となる文献は、篠田鑛造『明治開化奇談』（明正堂、昭和十八年）に収録される「勝田家の家系」で、ここには勝田家と所縁のある寺院の名前が挙げられている。

初代市兵衛の肖像を、浅草日輪寺の建碑に暁斎がサツと一筆描きのものがある。これが選文は、浅田宗伯であった。[15]

ここに記される「浅草日輪寺」とは、東京都台東区西浅草に位置する時宗神田山芝崎道場日輪寺のことである。嘉元三年（一三〇五）、時宗の二祖他阿真教によって豊島郡芝崎村（現在の千代田区大手町）に開かれた念仏道場を前身とする寺院で、明暦年間（一六五五～一六五八）に現在の地に移ったという。

篠田は日輪寺に勝田市兵衛の碑が建てられていると記しているが、[16]本寺院と勝田家の間にどのような所縁があるのかまでは明確にしていない。そこで日輪寺を訪問したところ、御住職より「日本橋の有力な商家であった勝田家は、日輪寺に毎月五両十両と寄付していたと伝えられている」とのお話を伺うことができた。なお、大伝馬町に位置した勝田家から西浅草の日輪寺までの距離は約三kmにあたる。

さらに、勝田家の家紋「沢瀉」（図5）と商標「曲尺に大の字」（図6）が刻まれた五基の墓石を確認することが

できた。また「大鐘氏」と刻まれた墓石もあり、「一、勝田家について」でも述べたが飽くまで「勝田」とは屋号であって、本姓は「大鐘」であったことがここからも窺える。ここで、「地獄極楽めぐり図」第五図に描かれた勝田家の墓石に目を向けてみると、「大」の一字が見える（図7）。これは、大鐘の「大」を表わしたものであろう。第三十六図には「正一位大鐘稲荷大明神」と記された幟（図8）が描かれていることから、勝田家には屋敷神として稲荷明神を祀っていたものと考えられる。

また、勝田家の家紋が入った墓石の内には、「勝嘉」「勝儀」「勝長」の文字がそれぞれ刻まれたものが見られた。これは「勝田」の屋号と「名前」を呼び縮めたものであろう。ここで篠田鑛造が制作した勝田家の系図（図9）[17]を参照すると、初代市兵衛の息子に嘉兵衛、二代目市兵衛の息子に儀兵衛、そして田鶴の兄に長蔵の名が見られる。「勝嘉＝勝田屋嘉兵衛」、「勝儀＝勝田屋儀兵衛」、「勝長＝勝田屋長蔵」であるとすれば、現存する勝田家の墓石のうち、兄にあたる「勝長」の墓に田鶴が祀られている可能性が高いといえるだろう。しかし田鶴の戒名「清鏡院寿弍貞讃大姉」が刻まれた墓石を確認することはできなかった。

ところで、本作には明治五年七月に新たに描き加えられた場面がある。そのうちの第三十七図（図10）は文明開化を迎えた極楽浄土を描いたもので、既に往生を遂げた田鶴が人力車に乗った幼子達を迎えている。しかし、田鶴と子供達との関係性や明治五年七月に描き加えなければならなかった理由は、これまで明らかとされてこなかった。ここで日輪寺の過去帳を紐解いてみると、明治五年の項目に「遊夢善童子　六月廿七日　勝田嘉兵衛」「愛蓮妙相童女　六月廿日　勝田市兵衛」の名が見られた。童子、童女とは幼くして亡くなった子供に付す位号で、戒名の下には命日と喪主の名前が記されている。先に紹介した勝田家の系図（図9）を参照すると、嘉兵衛と市兵衛は

五兵衛の兄弟にあたり、遊夢善童子と愛蓮妙相童女は田鶴のいとこにあたる。なお、この子供達が亡くなった翌月に第三十七図が描かれていることから、あるいはこれが、本図に描かれた子供にあたる可能性を見出すことができ、この幼子を追善するため明治五年七月に新たに図が追加されたとも考えられるだろう。

また、日輪寺過去帳の明治十四年（一八八一）の項に「高貺院頂阿法山居士 七月十七日 勝田五兵衛 初代」とあることは注目される。大柳久栄氏によると、勝田家の真向かいに店を構えていた書肆文渓堂丁字屋平兵衛家の過去帳には「明治十四年七月十七日に勝田五郎兵衛とある。お田鶴の父親五兵衛とよく似た名」[18]があるという。高貺院頂阿法山居士と勝田五郎兵衛の命日が同じであること、そして日輪寺過去帳に初代と書き入れがあることから、田鶴の父である初代五兵衛は明治十四年七月十七日に亡くなった可能性が高いといえる。

では、「地獄極楽めぐり図」に描かれた勝田家菩提寺はどれほど忠実に日輪寺の姿を写しているのだろうか。まず、本作の第六図に描かれた寺院の特徴を述べると（図11）、本堂から向かって右に漆喰塗の壁で覆われた渡り廊下が続き、方丈と思われる建物につながる。方丈の前には大きな釣鐘が描かれ、本堂から向かって左手には屋根頂上に宝珠が付けられた小堂があり、これにも漆喰壁が施されているように見える。本堂真向かいの門を出ると、さらに塔頭のような建物が続き、門外のすぐ側には大きな地蔵菩薩像が描かれる。門と墓地との位置関係から、本像は第五図で阿弥陀如来と田鶴らに、蓮台から降り膝をついて礼拝をしていた地蔵だといえる。屋外に設置されていること、また石像には通常見られない別製の光背を取り付ける枘が背中に造り出されていること、そして蓮台とその下に据えられた石の台座とで彩色が異なることから、本像は銅製の地蔵だと推測される。なお、文政十二年（一八二九）に幕府により編纂された、江戸の寺社仏閣の情報を集めた地誌『御府内備考』[19]に記された日輪寺の項目に

は、「露出銅像地蔵尊　林光院門外在」とあり、これは本図の地蔵菩薩像を指していると思われる。また、日輪寺にはかつて、安称院、林香院、宝珠院、東福院の四院を含む塔頭が存在しており、本図にはその屋根と思しきものも描かれている。

ここで、東京都公文書館が所蔵する『妙満寺八品・興門本成寺・黄檗・時宗明細簿・明治十年調製』（東京都文化財指定）に収録される日輪寺の絵図（図12）と「地獄極楽めぐり図」に描かれた寺院とを比較する。本堂から渡り廊下が東に伸び方丈に繋がる点、西に観音堂を配し、南には鐘楼堂と井戸が位置する点が一致している。なお、絵図には鐘楼堂の側に「六地蔵」と書かれているが、「地獄極楽めぐり図」第六図では田鶴達に礼拝する地蔵像の側に配置されている。また、絵図には建物の配置だけでなく境内の樹木についても記録されており、本堂と庫裡の間に植えられた松や本堂裏手の樫も本作第六図に描かれている。さらに絵図に記された方位から、第六図の田鶴一行が進む先は西方、すなわち浄土であることもわかり、物語のプロローグに相応しい構図となっている。この様に暁斎は忠実に日輪寺の境内を描くことで田鶴と阿弥陀如来の旅立ちに迫真性をもたせ、田鶴の極楽往生を願いまた勝田の遺族を慰めようとしたのではないだろうか。

さらに全国の時宗寺院の由緒や本尊、什器などをまとめた『時宗寺院明細帳』[20]を紐解いてみると、日輪寺の項目には勝田家からの寄進物が多く記載されている。以下、勝田家寄進の什物を紹介することで、日輪寺と勝田家の間には密接な交流があったことを見てゆきたい。

・『（明治十年）時宗明細簿』（東京都公文書館所蔵史料）

一唐金花立　壱対
一木蓮華　壱対　但二品共明治二年四月勝田一統ヨリ寄附
一大鑿子　壱口　但明治九年十一月勝田一統ヨリ寄附
一大打敷　縫紋付　壱枚　但明治五年六月勝田五兵衛寄附
一常香台　壱具　但元治元年勝田一統ヨリ寄附
一吸物椀　貳拾人前　但此勝田五兵衛寄附年月不詳

ここでは「勝田一統」という記述が目立ち、家同士の結び付きの強い一家であったことが窺える。また、田鶴が亡くなった一ヶ月後の明治二年四月には勝田一党より唐金花立と木蓮華がそれぞれ一対ずつ寄進されている。さらに田鶴の三周忌にあたる明治五年には、勝田五兵衛が縫紋付の打敷を寄進している。打敷とは仏前の机に掛けて堂内を荘厳する染織品である。追善供養のため死者が生前に着用した小袖を打敷に仕立て直し、寺院に奉納する例は少なくない。[21] 例えば「亀甲檜垣に藤文様小袖」（京都国立博物館蔵）は、京都国立博物館が平成九年（一九九七）に購入した当時は打敷に仕立てられており、角には「御本尊前　□□□□　願正寺」の墨書が確認できる。また、国立歴史民族博物館に所蔵される「小袖屏風」は、様々な小袖の裂を押絵貼りにしたもので、その内には「打舗一幅謹以　奉納永祈冥福　享保九年甲辰五月十七日　施主小野田氏　浄甫」と墨書された裂が含まれており、追善供養のために打敷が奉納されたことがわかる。

・『（明治二十七年）寺格明細帳』（京都金光寺所蔵史料）

一御手掛机　仙徳色付五具足　新調寄附主室町伝馬町勝田一家中　壱具

一蓮形供物台　同　高村東雲　弐対

一仙徳色付大五具足　新調寄附主　伝馬町勝田一家中　壱具

ここで注目されるのは蓮形供物台の項目に記された高村東雲（一八二六～一八七九）の名である。高村光雲の師であった東雲の菩提寺は日輪寺ではなく下谷区入谷の浄土宗静蓮寺であることを考慮すると、東雲の得意客であった勝田家の[22]注文によって制作され、寺院に寄附された什物であろう。

・『（明治三十七年）寺院明細帳』（遊行寺宝物館所蔵史料）

一来迎佛　金泥　紙地　壱幅　但寄付者　勝田五兵衛

一大五具芦　宣徳色　寄付主勝田一家中　壱具

一紫呉良服并小柳紋附　寄付主勝田市兵衛　弐枚

以上、寺院明細帳の記録から勝田家は日輪寺の有力な檀家であったことを確認した。

三、「地獄極楽めぐり図」にみる時宗の教義に基づくモチーフ

日輪寺は時宗の寺院である。時宗は鎌倉時代末期に興った浄土教の一宗派で、宗祖は一遍上人、藤澤山無量光院清浄光寺（神奈川県藤沢市）を総本山とする。「南無阿弥陀仏」の称名を唱えることを重要とし、阿弥陀如来を信仰していなくとも弥陀の本願により衆生の極楽往生は決定していると説く。

本項では、「地獄極楽めぐり図」に描かれた時宗の教義に基づくモチーフに着目してゆく。

①「六十万人決定往生」の門柱

まず、本作第五図の、跪く地蔵菩薩の後方に建てられた屋根付き塔婆形の門柱（図13）に注目したい。画像が不鮮明なため分かり難いが、ここには「六十万人決定往生」と記されている。「六十万人」とは一遍上人が熊野権現のお告げによって得た教化すべき人々の数であり、延いては一切衆生をも意味する。「決定往生」とは往生することが定まって動かないということ。すなわち、全ての人々は極楽往生が約束されているという趣旨の内容である。[23]一遍は念仏を勧めるために「南無阿弥陀仏　決定往生六十万人」と記された念仏札（図14）を配り歩いた。これを時宗では賦算と呼んでおり、現在でも遊行上人によって信徒に手渡しで配られている。

日輪寺にこのような塔婆が実在したか定かでないが、田鶴の極楽往生を強調するために一遍の念仏札を想起させるモチーフが描かれたものと考えることもできる。

②阿弥陀如来の賦算

第三十三図（図15）では、捻じり鉢巻を締めた阿弥陀如来が勢い良く「南無阿弥陀仏」の六名号を撒いている。亡者達が名号を取り合って揉みくちゃになる様子は、『江戸名所図会』（天保五～七年刊）に描かれる浅草寺の節分会（図16）において守り札を取り合う民衆をも想起させるが、「六十万人決定往生」の塔婆の例に鑑みるならば、賦算に見立てたものと考えられる。

③釈迦如来の遣使と阿弥陀如来の来迎

最後に本項で最も強調したい点は、「地獄極楽めぐり図」が釈迦如来と阿弥陀如来の「二尊」構成となっている点である。先述したように、本作は田鶴の臨終と阿弥陀如来の来迎から始まる。そして、最終場面である第四十図（図17）では釈迦如来が雲間から顔を覗かせる。

二尊形式をとる仏画の先例としては、「二河白道図」が挙げられる。この画題は中国唐代の宗教家・善導（六一三～六八一）の著作『観無量寿経疏』に説かれる二河の譬を絵画化したもので、此岸である娑婆世界と彼岸である極楽浄土が二分化して描かれ、その二つの世界を結ぶ道は白道と呼ばれる。白道の前には一人の男が佇んでおり、道の両側には怒り憎しみ（瞋憎）を表わす火河と貪愛を表わす水河が流れ、男の背後からは賊軍が迫ってくる。細く頼りない道だが、前進するしかない男は此岸から見送る釈迦如来の「汝、ただ決定してこの道を尋ね行け」という励ましの言葉を受け、彼岸の阿弥陀如来からの「汝、一心正念にして直ちに来れ、我れ、汝を護らん」との呼び掛けに応え、男は極楽往生を果たしたという。

「二河白道図」から二尊の働きをより簡略化した絵画として「聖衆来迎図」（徳島、雲辺寺蔵）が挙げられる。往生者を見送る此岸の釈迦と、そのもとに来迎する彼岸の阿弥陀を描き、往生者が現世から送り出されて西方極楽浄土へ迎え入れられるという浄土信仰の首尾完結を強調した絵画作品である。

そして、時宗において「二河白道図」は特別な位置づけにある。時宗の開祖である一遍上人の布教活動と生涯を記録し正安元年（一二九九）に成立したとされる「一遍上人絵伝」（清浄光寺蔵、東京国立博物館蔵）の詞書きによると、文永八年（一二七一）の春、信州・善光寺に訪れた一遍は「二河の本尊」に感銘を受け、その絵を描き写したという。[24] それを本尊として伊予国・窪寺で三年間の念仏三昧を送った一遍は、阿弥陀如来の悟りと衆生の往生は一つのものという「十一不二の偈」を感得した。現在でも時宗総本山清浄光寺では、毎年十一月に「歳末別時念仏会」を行い、本堂内陣を報土（極楽浄土）と穢土（彼岸）に見立てて二河白道の教えを実践している。このことから、時宗において二河の喩は重要な教義であることが窺える。

「地獄極楽めぐり図」でも、最後の場面で此岸から往生者を見送る釈迦如来を描き、今までの物語を振り返るように蛙が描かれていることから、終始一貫して田鶴の極楽往生は約束されており揺ぎ無いということを強調したものと思われる。

おわりに

以上、篠田鑛造の記述を手掛かりとして勝田家の菩提寺を特定するに至り、現在も日輪寺には勝田家所縁の墓石があることを確認した。また大きな商家であった勝田家は日輪寺に多くの什物を寄付していたことがわかり、その

中には田鶴追善と関わりがあると思われる物も見られた。さらに、過去帳の記録により本作第三十七図に描かれた人力車の子供達が田鶴の親戚にあたる可能性が高まったことで、本図の解釈を進めることができたと思う。

勝田家の菩提寺の宗派が明らかとなったことで、本作に描かれた図様の新たな解釈も提示できた。「六十万人決定往生」と書かれた門柱、念仏札の賦算、そして遣迎二尊と、それぞれ時宗の教義に基づいた表現がなされている。しかし暁斎は当世風俗に擬えて賦算を表現したり、本作を最後まで見てはじめて田鶴が釈迦如来と阿弥陀如来の二尊に守られて極楽往生を遂げたことがわかるなど、様々な仕掛けを施している。これは、本作に詞書きはないながらも、その説明的な構成と細かな描き込みによって物語の展開が理解でき、見れば見るほどその内容を読み解いてゆける特徴と関連することだろう。依頼主の勝田家も、本作を前にして田鶴との思い出を交えながら様々な事を語ったことだろう。田鶴の死後の世界についての語りを促し、想いを馳せさせる仕掛けをなすことで、暁斎は田鶴の追善としたのではないだろうか。

註

（1）勝田家は文化芸術を愛好し後援した一家であった。勝田家は彫刻家高村東雲（一八二六～一八七九）の「上華客」であったことが、弟子の高村光雲による回顧録『光雲懐古談』（万里閣書房、昭和四年）に記されている。また、歌舞伎役者の五代目尾上菊五郎（一八四四～一九〇三）を贔屓にしていたことが、山岸宗『五世尾上菊五郎』（文學堂、明治三十六年）や島崎藤村「スケッチ」（『中央公論』明治四十三年一月）に紹介されている。

（2）「地獄極楽めぐり図」の他に勝田五兵衛が暁斎に依頼した作品として、「惺々狂斎画帖（一、二）」（河鍋暁斎記念美術館蔵）、「惺々狂斎画帖（三）」（個人蔵）、「惺々狂斎興合画帳」（河鍋暁斎記念美術館蔵）、「墨合戦絵巻」（個人蔵）、「ひな

祭り図」（個人蔵）が知られている。なお「ひな祭り図」には明治三年三月十日の款記が見られること、勝田家の家紋「沢瀉」が描き込まれていること、田鶴と思しき少女が菩薩らと共に雛遊びをしていることから、「地獄極楽めぐり図」とともに田鶴を追善するために描かれた作品であると考えられている。

（3）第三十九図には「南無阿彌陀佛 清鏡院壽弐貞讃大姉 如来尊縁起」と記されている。「清鏡院壽弐貞讃大姉」とは田鶴の戒名である。このことから、本作は田鶴が如来となるまでの物語を描いたものだと考えられる。

（4）制作年月日と記したが、勝田家に納めた日付を意味する可能性も考えられる。新聞記者の篠田鑛造が暁斎の娘暁翠に取材した記事（篠田鑛造「父暁斎を語る――亡暁翠女史の遺語」『明治文化研究』第六輯、昭和十年）によると、暁斎は勝田家から制作依頼を受けると「本奉書を六ツ折にし、ソレへ一枚十日間もかかって極彩色の錦絵を描」いたとある。しかし本作の款記を見ていくと同じ日付を持つ図が二枚あることなどから、暁斎はある程度描き溜めたものを五兵衛に届けていたのではないだろうか。

（5）「地獄極楽めぐり図」第三十二図の大部分は明治二年六月二十六日に描かれているが、画面右隅の円窓のみ明治五年七月に描かれていることが款記から明らかとなっている。

（6）神田山日輪寺御所蔵の過去帳には、「清鏡院壽弐貞讃大姉」（田鶴の戒名）の欄に「明治二年三月九日」と記されている。

（7）石井研堂「畫癖河鍋暁斎」下（『絵画叢誌』第三百五十四号、絵画会叢誌部、大正六年）によると、「勝田五兵衛、俳名は月之輪」とある。

（8）『日本橋区史』上、東京市日本橋区役所、昭和十二年。

（9）前掲註8所収。

（10）加美山史子「勝田五兵衛と勝田家に関する一考察」（『暁斎』第五十八号、河鍋暁斎記念美術館、平成九年）所収の年譜。林英夫・芳賀登編『江戸明治庶民史料集成』（柏書房、一九七二年）に収録される長者番付、『商工信用録』（東京興信所、明治三十三年、大正十二年）等を基に制作。

（11）篠田鑛造『明治開化奇談』明正堂、昭和十八年、五九頁。

（12）島崎藤村「スケッチ」（『中央公論』明治四十三年一月、二四四－二四五頁）。
（13）前掲註1参照。
（14）「地獄極楽めぐり図」第二十三図に描かれる歌舞伎役者は、服部幸雄氏により八代目市川団十郎であると解釈され続けてきた（服部幸雄「極楽と芝居の盛り場の幻想」『暁斎』第四十二号、河鍋暁斎記念美術館、平成二年）。しかし、本図に描き込まれた「橘」（市村羽左衛門系列の定紋）と「杏葉菊」（尾上梅幸の替紋）の紋様、そして風貌の特徴から、五代目尾上菊五郎と同定した。
（15）篠田鑛造「勝田家の家系」（『明治開化奇談』明正堂、昭和十八年）。勝田家と浅田宗伯（一八一五～一八九四）の関係は詳らかではないが、暁斎は「宗伯夫妻影絵」（明治十三年、ナカガワフォトギャラリー蔵）を残している。
（16）初代市兵衛の碑について日輪寺御住職関口勇一氏に伺ったところ、この碑は現存せず、関東大震災や東京大空襲などで焼失した可能性が考えられるとのことである。
（17）前掲註15所収。しかし、篠田はどのような資料を基に本系図を制作したかを明記しておらず、「ある人によって、ことごとく識り得た」ことを系図にしたと記す。
（18）大柳久栄「下絵修復から見た地獄極楽めぐり」（『暁斎』第四十二号、平成二年、五三頁）。
（19）朝倉治彦解説『御府内寺社備考』第六冊時宗・法華宗、昭和六十二年、三頁。
（20）時宗教学研究所編『時宗寺院明細帳　4』時宗教学研究所、平成十六年。
（21）河上繁樹「花洛のモード　――きものの時代――」（図録『特別展覧会　花洛のモード　きものの時代』京都国立博物館、平成十一年）参照。
（22）前掲註1参照。
（23）総合佛教大辞典編集委員会編『総合佛教大辞典上・下』（法蔵館、昭和六十二年）を参考とした。
（24）「一遍上人絵伝」の詞書による。小松茂美編『日本絵巻大成　別巻　一遍上人絵伝』（中央公論社、昭和五十三年）を参考とした。以下、一遍が二河の本尊に感銘を受けた箇所を抜粋して紹介する。

・巻第一〔第三段〕

文永八年の春、聖、善光寺に参詣し給ふ。この如来は、天竺の霊像として、日域の本尊と成り給へり。酬因の来迎を示して、影向を東土の境に垂れ、有縁の帰依を改めて、霊場を信州の中に占め給ふ。一光三尊の宿縁の密意を表し、決定往生の勝地給（ひ）、他方の霊場に超（え）たり。

〔図版出典〕

・図1～3、5、7、8、10、11、13、15、17『暁斎』第四十二号、河鍋暁斎記念美術館、平成二年。／図4、6『日本橋区史』上、東京市日本橋区役所、昭和十二年。／図9 篠田鑛造『明治開化奇談』明正堂、昭和十八年。／図12『妙満寺八品・興門本成寺・黄檗・時宗明細簿・明治十年調製』（東京都公文書館蔵）。／図14 筆者撮影／図16 鈴木棠三・朝倉治彦校注『新版　江戸名所図会』（下巻）、角川書店、昭和五十年。

謝辞

本稿の執筆にあたり、大阪大学大学院橋爪節也教授から終始ご指導を賜り、多くの方々からご助言をいただきました。日輪寺御住職関口勇一様からは格別なご配慮をいただき、勝田家に関します貴重な資料と情報を賜りました。末筆ながら、ここに記して感謝の意を表します。なお、本稿は日本学術振興会特別研究員のための「平成二十四年度文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果」の一部です。

（大学院博士後期課程学生・日本学術振興会特別研究員）

図１　「地獄極楽めぐり図」より第４図「田鶴の臨終と阿弥陀如来の来迎」
（静嘉堂文庫美術館蔵）

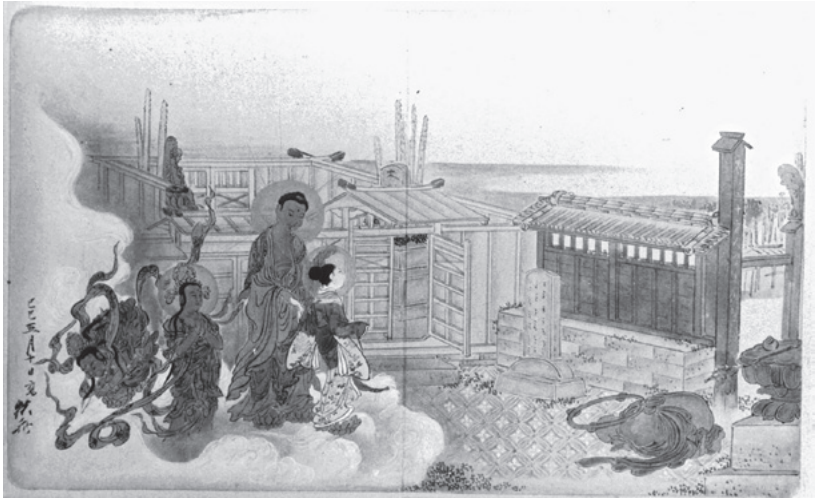

図２　「地獄極楽めぐり図」より第５図「田鶴一行と地蔵菩薩」
（静嘉堂文庫美術館蔵）

図３　「地獄極楽めぐり図」より第６図「菩提寺からの旅立ち」
（静嘉堂文庫美術館蔵）

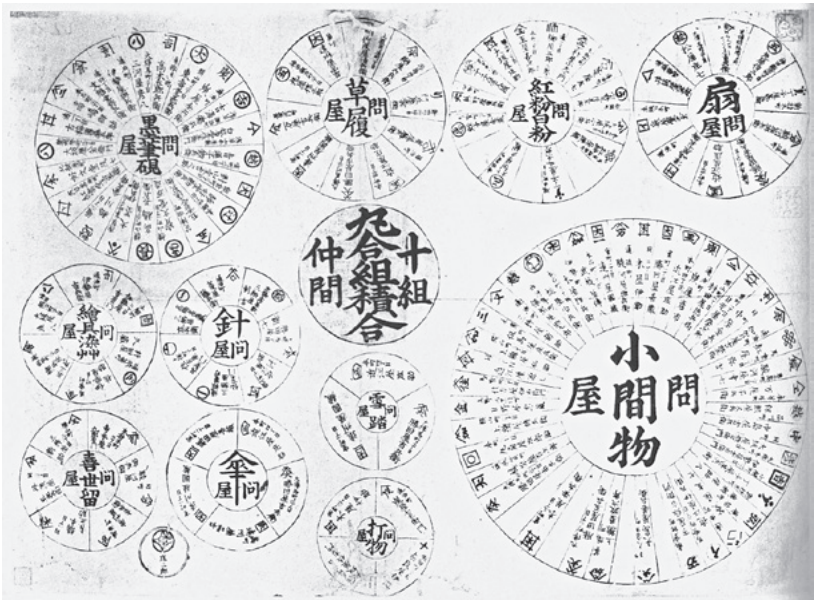

図４　「十組丸合組積合仲間」（三井文庫蔵）

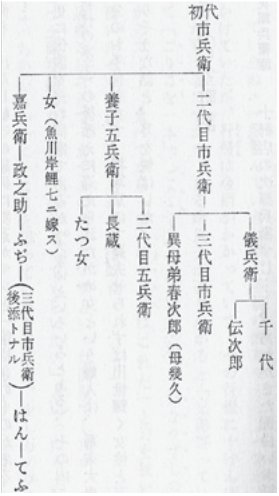

図９　勝田家系図

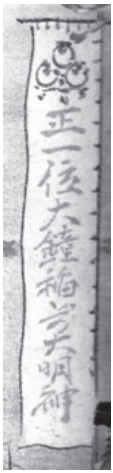

図８　「地獄極楽めぐり図」第36図より稲荷大明神の幡

図６
図４より商標
「曲尺に大の字」

図５
「地獄極楽めぐり図」
第１図より家紋「沢瀉」

図７　「地獄極楽めぐり図」第５図より
勝田家墓石に見える「大」の字

図 10　「地獄極楽めぐり図」より 第 37 図「極楽行きの列車」
（静嘉堂文庫美術館蔵）

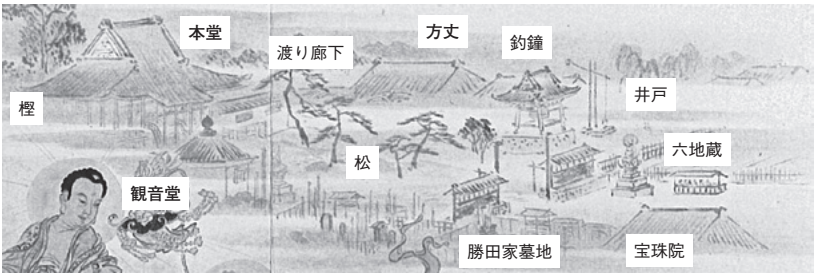

図11 「地獄極楽めぐり図」第6図より田鶴の菩提寺・俯瞰図

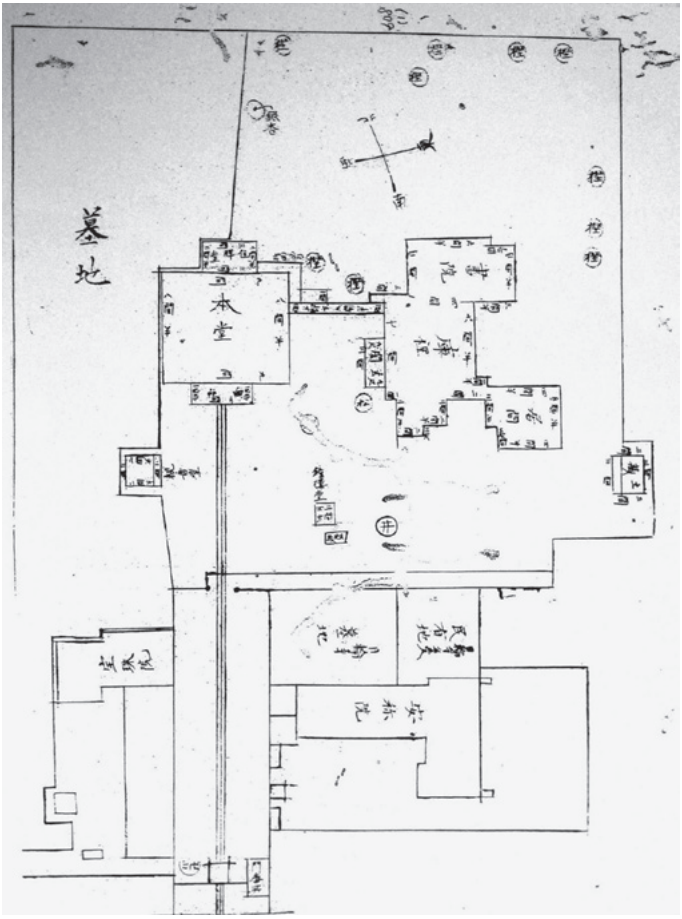

図12 『妙満寺八品・興門本成寺・黄檗・時宗明細簿・明治十年調製』より日輪寺 絵図（東京都公文書館蔵）

図13　「地獄極楽めぐり図」第5図より「六十万人決定往生」と記された門柱

図14　念仏札（筆者蔵）

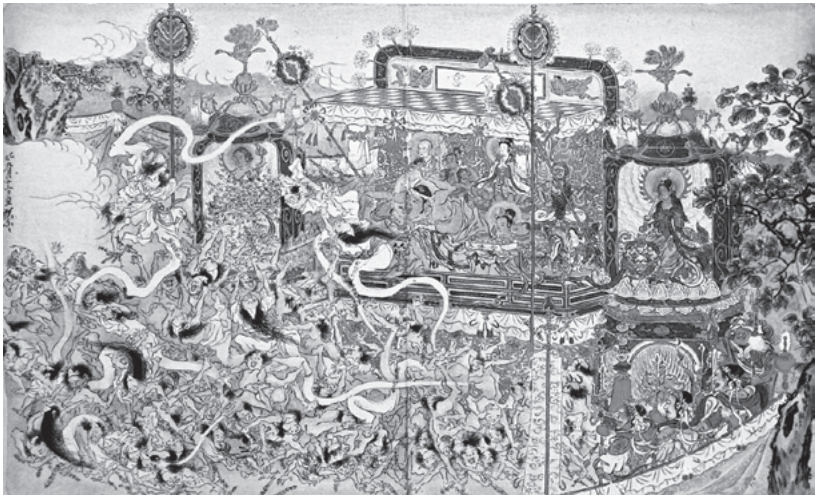

図15　「地獄極楽めぐり図」より第33図「阿弥陀如来の賦算」

（静嘉堂文庫美術館蔵）

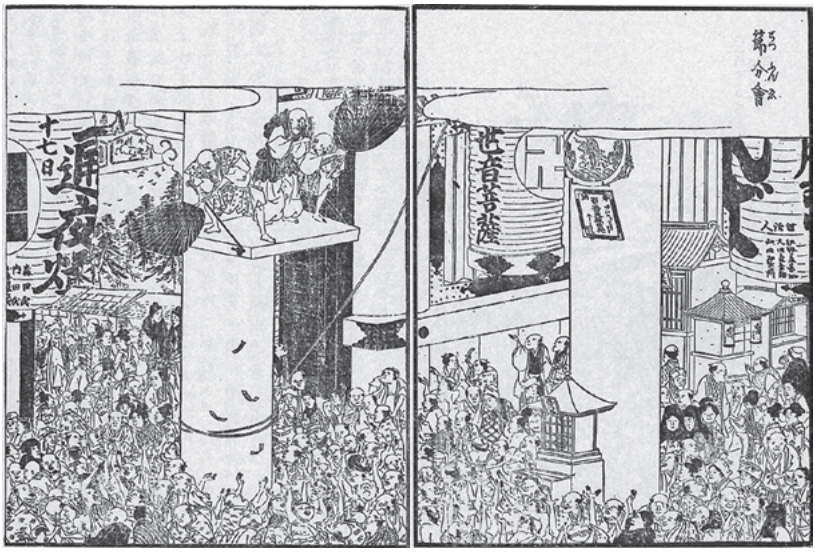

図 16 『江戸名所図会』より「浅草の節分会」

図 17 「地獄極楽めぐり図」より第 40 図「釈迦如来」
（静嘉堂文庫美術館蔵）

SUMMARY

A Journey around Hell and Paradise by Kawanabe Kyosai and the Family Temple of the Katsuta

Megumi SODA

A Journey around Hell and Paradise (Seikado Bunko Art Museum collection) by Kawanabe Kyosai(1831-1889), was active as a painter from end of Edo to Meiji period and the paint is known as a work which Kyosai's major patron, Katsuta Gohe, a wealth merchant of Nihonbashi requested Kyosai to paint. This work was produced in commemoration of Gohe's daughter named Tatsu who died young in Meiji 2 (1869), and it consists of 40 figures in total. The story is about Tatsu's journey with the Buddha Amida and King Enma with enjoyment, and go to paradise. The work is renowned as a masterpiece of Kyosai because it has ingenious narrative as well as precise and beautiful draw.

The family temple of the Katsuta is drawn in this work. However, the consideration of the seat of this temple had not been advanced in previous studies. The production purpose of this work is the memorial service of Tatsu. It is very important to specify the family temple of the Katsuta in thinking about the production background. Then, I investigated based on the document concerning the Katsuta family, and it has been revealed that the seat of the family temple is Nichirin-ji temple located in west Asakusa. In this thesis, it introduces details behind the incident that specify the family temple.

Nichirin-ji temple is a buddhist temple of Ji-sect. And it has been recognized that several pictures based on the doctrine of Ji-sect is drawn in this work. In this thesis, the relations between those pictures and the memorial service are also considered.